

第51回理事会開催

1989（平成元）年度の事業計画を決定

トヨタ財団では、第51回の理事会を去る3月15日、都内にて開催し、第4回研究コンクールの最優秀賞・優秀賞および1988年度市民活動助成の助成対象などを決定するとともに、1989年度の事業計画を決定した。

これにより、昨年度の助成実績は5億720万円、本年度の助成予定額は、5億1,000万円となった。（内訳については、p.7参照）

●研究助成の公募は5月末まで

本年度も4月1日より研究助成の公募を開始した。

基本テーマ（『新しい人間社会の探求』）および重点課題（「高度技術社会への対応」、「多文化社会への対応」）は昨年度と同様。また、研究種別についても、個人奨励研究〔第Ⅰ種〕、試行・準備研究〔第Ⅱ種〕、総合研究〔第Ⅲ種〕となっている。

●市民活動助成（「記録の作成」）の公募も5月末まで

昨年度に引き続き、「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」に対する助成の公募を4月1日より開始した。なお、これまでの本助成により作成が完了した「記録の出版」に対する助成の申請も受付けている。

●第6回研究コンクールの実施は延期

本来なら本年度は第6回を開始する年に当たるが、これまで5回にわたり実施してきた当コンクールの総括評価（現在実施中）にもとづき今後の展開方針を検討していくため、その実施は来年度以降に延期することとした。

第4回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」

「行徳野鳥観察舎友の会」が最優秀賞を受賞

'85年11月に公募を開始して以来、約半年間の予備研究を経て2年間の本研究へと段階的に進められてきた当研究コンクールは、先の理事会にて最優秀賞1件＝「行徳野鳥観察舎友の会」（千葉）および優秀賞3件＝「上野・谷根千研究会」（東京）、「アンバル野鳥研究会」（沖縄）、「酪農ヴィレッジ研究会」（東京）を決定した。

去る4月7日には、東京・六本木の国際文化会館にて、各賞の贈呈式と研究報告会が開催された。なお、最優秀賞には賞金100万円、優秀賞には同50万円が贈られた。

おもな内容

- ◆第4回研究コンクール最優秀賞等の選考を終えて…2
- ◆“生活術”としての市民の研究……………3~4
- ◆アイヌ文化研究への新しい視点……………4~5
- ◆世界のカイト・フォト展と国際シンポの開催…5~6
- ◆『チャム彫刻』の出版とヴェトナムでの助成活動…6~7
- ◆88年度助成実績および89年度助成予定、他……7
- ◆第26回研究報告会のご案内、他……………8

●国際助成の応募は年中受付

主に、東南アジアの人々（グループもしくは個人）によって現地で行われる固有文化の保存と振興に関するプロジェクトに対して助成するもので、公募期間は特に定めず、年中打診や応募に応じている。

●成果発表助成の申請も年中受付

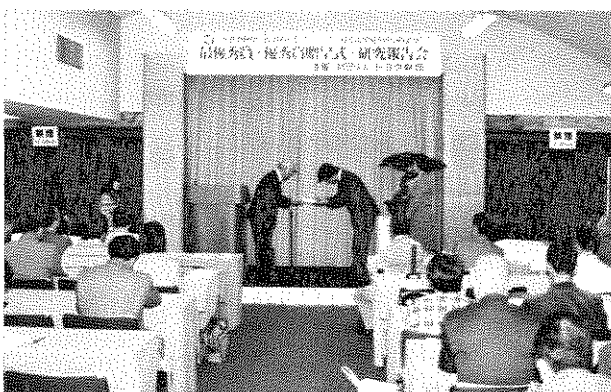
当財団の助成による成果の印刷・出版、シンポの開催などに関する成果発表の助成は年中受付けている。

●新たに設定した計画助成

財団独自の調査と企画により、流動性のある助成を展開できるようにするため、従来のフォーラム助成、特別研究助成、民間助成活動促進助成、その他助成を統合し、新たに非公募制の計画助成を設定した。

第25回研究報告会を開催……………

去る3月2日（木）、『ヨーロッパから見たアイヌ文化』をテーマとした研究報告会を国際文化会館（東京・六本木）にて開催、約80人が傾聴した。（P.4~5参照）



▲最優秀賞を受ける「行徳野鳥観察舎友の会」のメンバー



第4回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

最優秀と優秀賞の選考を終えて

第4回研究コンクール選考委員長 浅田 孝

●はじめに

まず何より、最終段階に進んだ8つのチームが、まる2年半にわたってそれぞれのユニークな研究活動を完遂されたことを喜びたい。11月30日のまる一日かけた報告会での発表は、さすが全国の140チームから選抜されたものだけに、どれも十分に聞きごたえのある密度の濃いもので、長時間にわたって集中して傾聴したためか、いささか疲れを感じたが、しかしそれは大変爽やかな疲れであった。委員の先生方も多分同じであったろうと拝察する。

●選考経過について

最優秀賞と優秀賞の第一次審査は、その報告会の熱気もさめやらぬ12月6日に行われた。各委員はそれまでに、各チームの報告会内容や資料をもとにそれぞれの成果についてコメントを書き、最優秀賞候補一件と優秀賞候補数件とを推薦することにしてきた。委員会当日はさらにすべての報告書に目を通した上で、これらチームのひとつひとつについて、優れた点や問題のある点について意見を述べあい、暫定的に1件の最優秀賞候補と3件の優秀賞候補をとりあげることにした。そしてさらにこれら4件の研究のそれぞれを、2人ずつの委員が分担して報告書を持ち帰り、研究の内容を再度精読チェックした後、それらへの授賞につき異存のないことを確認して理事会に推薦することにした。

ほとんど全員一致で最優秀賞候補に決まったのは「行徳」チームであった。何人かの委員は優秀賞候補としていたが、他のほとんどの委員が最優秀賞に推薦しており、その評価はどれも高かった。野鳥保護区の保存運動に端を発し、それからさらに市民活動にふさわしい適正技術を活用して、保護区の鳥たちにとって好ましい環境へ向けての改善を図ってきたこのチームの活動は、さまざまな点で新しい実践的な市民科学の芽を含んでおり、将来の発展性・波及性も高い。予備研究段階から注目を集めており、大きな期待が寄せられてもいた。

優秀賞候補については、いくつか議論にのぼったが、

最終的には、「谷根千」と「アンパル」と「酪農ヴィレッジ」のチームが残った。何人かが優秀賞に、そして誰か一人は最優秀賞に推していたものである。いずれも、研究の中間段階ではまとまりに欠ける恨みがあり、多くの疑問も提出されていたが、後半に入ってからそれぞれにとって意味のある「何か」——チーム全員で共有でき他人に対しても説得力をもつような「何か」——をつかんで、それに向けて全力を集中できたものと思える。「行徳」はその「何か」を、早くも予備研究の段階でつかみ取り、本研究の初めから明確な基本目標のもとで、全員一致の行動がとれたと言うことだろうか。

惜しくも受賞できなかった4つのチームは、その「何か」をつかみ取るのが余りに遅かったか、あるいはそれが出来なかったために、いまひとつ大きな炎に燃え上がるころまでは行かなかったということなのだろうか。ただこれらのチームについても、優秀賞としてのいくつかの推薦や今後の活動への期待が寄せられていたのも事実であり、その真理探求の熱意とそれに払われた努力においては、何ら受賞チームに劣るものでない。これは選考委員の一致した感想で、むしろこれから大きな炎へと燃え上がることを期待したい。

●目立つ“鳥”関連の受賞

たまたま、前回（第3回）の特別賞が「都市鳥」で、今回も最優秀賞と優秀賞1件が野鳥関係ということになり、このコンクールは鳥に傾きすぎてはいないか、との意見も出たが、選考委員会としては決して鳥を特別に重視してきたわけではない。同じ野鳥研究といっても、この3件ではその扱いや視点は全く異なっているということ念頭においておかねばならないが、同時に野鳥を愛する人たちは全国的にも層が厚く、これまでの自然保護運動の中核としての長い歴史をもっており、しかも野鳥観察は、その気持ちさえあれば誰にも始めることができることから、適正科学・市民科学としての素地ができていたことを反映したものと見えよう。また、アカデミズムの世界でこれまでも、非常に地味な狭い分野であったためか、逆に市民研究に残されたフロンティアも大きいと言えるのかもしれない。この地上のすべての自然が、私たちにとって如何にかけがえのない友であるか、を改めて思い知らされた作業だった。



“生活術”としての市民の研究

——第4回研究コンクールより——

研究助成部門 渡辺 元

近年、創造的で意欲的な活動を行っている市民グループの間では、“ネットワーク”という言葉が用いられ、異なる価値観や活動内容を越えてヨコに緩く結びつき、生活レベルから様々な問題に対処していこうとする動きが起きている。これは、混沌とした現在社会を生き抜くための市民の“生活術”とも言うべきものなのかも知れない。但し、「術」を習得するためにはそれなりの知恵が要る。これについては、当財団の助成対象の中に参考となる事例が幾つかある。

ここでは、その中から、第4回研究コンクールにおいて本研究の助成対象となり、2年間、それぞれの地域において地道に、且つ、粘り強く研究を続けてきた8つのグループにつき、一段落した今、改めて紹介してみたい。

【上野・谷根千研究会】

再開発や地上げの荒波が押し寄せ、これまでの生き生きとした街を支えてきた気さくで世帯な住民達がどんどんと居なくなっている上野・谷中(東京・台東区)根津・千駄木(文京区)。「このままじゃ、街がダメになる!」と、危機感を持った人々が地元の大学関係者達と手を結び、“親しまれる環境”づくりを目指した研究・広報活動を行っている。今は、この界限を通り過ぎていった多くの人々の記憶に残る「谷中・五重の塔」再建に



▲全国的にも有名な手作り雑誌

【神田サウンドスケープ研究会】

祭と古本屋と学生の街で有名な東京・

神田。今では再開発が進みビジネス街に変貌しようとしている。ニコライ堂の鐘の音や製本機のリズミカルな音は洪水の様に流れる車の音に掻き消され、花町として一世を風靡した頃の芸者と酔客の戯れる嬌声や足音、そして「流し」の弾く三味やギターの音も今はない。そんな地域で、音楽好きの若者が集り、「神田らしさを形成していたサウンド・スケープ(音風景)とは何なんだろう?」と試行錯誤の研究活動をしている。

【行徳野鳥観察舎友の会】

「ウォーター・フロント開発計画」という大規模開発の大波に飲込まれようとしている東京湾岸地域。その一部に当たる千葉県市川市行徳。ここでは、「工場やビルを建てることだけが土地の有効利用ではない。人間にとって住みにくい所は鳥にだって住みにくいに違いない。」と、同地区の野鳥観察舎に係わるメンバー達が中心となり、水車によるドブ川の水質浄化や人工池の創出により、水鳥の誘致や野鳥保護の活動を続けている。



▲イラストも可愛い通信

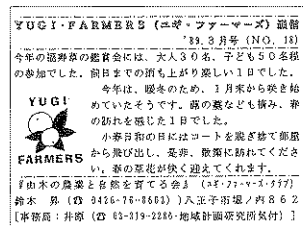
【しりたいたクラブ】

アメリカ・パークレーにあるCIL(障害者自立センター)に一年間留学し、帰国後、京都に拠点を置いて日本における障害者の自立のための(研究)活動を行っている自らも重度障害者のT君。彼の通う大学院の(彼と意を共にする)学生や院生達が集り、自立のための基本的問題である“食事”に焦点を当て、障害者の食環境の実態を把握し、その改善等を目的とした提言や活動を行っている。

【酪農ヴィレッジ研究会】

ニュータウン建設とそのための宅地開発が延々と続く東京・多摩丘陵。その一画にある八王子市寺沢地区。ここには、昔から余り手がつけられていない場所や

その自然とうまく調和しながら生きてきた酪農集落がある。「計



▲オイシイ情報一杯の通信

画通り開発されれば自然環境だけでなく先祖から伝わる有形・無形の技術が無くなってしまおう!」と、当地に飽くまでこだわり、これまで通りの“自然体”を貫こうとする農家の高齢者達が、地域計画を専門とする若者達と一緒に、この地域を残すための理性的な方法を模索している。

【おいわあねっか屋久島】

縄文杉で有名な屋久島だが、ここは杉に限らずあらゆる植物の天然宝庫。南に位置しているにもかかわらず、冬には冠雪も見られる程の高い山々があるからだ。こんな自然に恵まれた所だが、問題は多い。一つは、離島に共通して見られる過疎化の現実。もう一つは、リゾート開発の進行による様々な影響。こうした状況下、島とその自然を愛する人達が集り、植物と島の人々の係わりを調べることに、今後の島のあり方を考えるための基礎的な(研究)活動を行っている。

【オホーツク流水研究会】

毎年、晩秋になると北の海からやってくる流水。翌年の春先までオホーツクの海を覆いつくし居座り続ける。流水の接岸に伴い、紋別街からは活気が失せていく。そんな白い絨毯と人々は嫌々共存してきた。これに対し、地元の有志と専門家が連携し、流水を“招かれざる客”として考えるのではなく、むしろ積極的に受け入れ・活用することにより、活気ある街づくりの契機にすることを狙いとした活動を行っている。毎年2月の「紋別流水まつり」は恒例となりつつある。

【アンパル野鳥研究会】

日本最南端に位置する八重山諸島の中心・石垣島。その南西に面した湾の奥には、地元の人々にも余り名の知られてい



ない“アンパル”という一帯がある。豊富な魚介類やそれらを求めてやってくる多くの野鳥だけでなく、周辺には見事な



▲反響を呼んだアンパル展

マングローブ林のある学術的にも貴重な地域だ。しかし、ここも多くの開発による様々な影響から免れない。「アンパルを守ることは鳥全体の自然を守ることだ!」と、島内の学校教師や野鳥愛好家達と一緒に、保護活動を行っている。

以上の様に、私達を取り巻く様々な問題に対して、ごく身近なレベルからの発想にもとづき、地域にコダワリ、色々な問題にぶつかりながらもメケズにコリスにシタタカに活動を展開しているグループは全国に多々ある。これらが“ネットワーク”することにより、本当の意味での市民にとって住み良い社会が、いつの日か到来することを願って止まない。

アイヌ文化研究への新しい視点

——第25回研究報告会より——

研究助成部門 山岡義典

3月2日(木)午後、東京・六本木の国際文化会館で第25回の研究報告会がもたれた。テーマは「ヨーロッパから見たアイヌ文化」。西ドイツのボン大学を中心に、5年にわたって進められてきたヨーロッパのアイヌ関係コレクション調査の発表とそれを巡っての討論である。

❖ヨーロッパのアイヌ観の変遷を反映したコレクションの特徴

前半のセッションでは、3人の研究者によって調査結果の内容が報告された。冒頭は、代表者のクライナー・ヨーゼフ氏(元ボン大学日本文化研究所所長、現ドイツ日本研究所所長)による総括報告。

報告に先立ち、3日前に届いたばかりのニュースを披露。今年秋に行われるECの日本記念事業で、ベルギーがケルン市立民族学博物館のアイヌ特別展を誘致することにし、その詳細な解説付きの図録(ドイツ語)もフランス語訳されることになった、というものである。改めてヨーロッパにおけるアイヌ文化への関心の高まりを実感するとともに、今回の調査研究の一環として企画され実現した特別展や図録が、国境を越えて高く評価されたことが何より嬉しい。

続いて調査のいきさつ、経過と5000点近くに及ぶ確認資料の分布や概要が述べられたが、これは当日配布のレジュメに詳しい。恐らく多くの聴衆が深く感銘を受けたのは、それに続く16世紀以来のアイヌ観の歴史と関係づけたコレクションの解説であろう。今回初めてその実態が明らかにされたコレクションの背景を、クライナー氏の深い学識が一つ一つ紐解いていく過程は、多数のスライドとともに、多くの人を魅了したに違いない。

▼報告を行うクライナー所長



❖明るみに出た民族資料やアイヌ絵をスライドで紹介

クライナー氏に続いて岡田路明氏(白老アイヌ民族博物館学芸課長)による報告。岡田氏は5ヶ月ずつ2度にわたりボンに滞在し、撮影された写真によって膨大な数の民族資料の鑑定を行うとともに、主なものについては各地の博物館を訪ねて実見・確認した。

ヨーロッパに保存されている資料の特徴をあげると、①日本の資料より古いものが多い、②サハリン(樺太)の資料が多い、③記録に残されている資料がある、

④日本で確認されていない資料がある、⑤全般に亘って系統的に収集されている、といった点があげられるが、これらの特徴を示す代表的な資料が多数スライドで紹介され、大きな興味をひいた。

続いて佐々木利和氏(東京国立博物館資料第三研究室長)からのアイヌ絵についての報告。まずアイヌ絵というものが学問分野でまだ確立した概念でないことを説明、佐々木氏自身の定義に関する解説をした後、40日間の現地調査で確認した11博物館の89点のアイヌ絵のうち、特徴的なものが紹介された。

平澤屏山の絵で「亥冬日写」や「子冬日写」と年記の入ったものもみつかり、これが屏山の事蹟を研究する上で大きな意味をもつだろうという美術史的観点からの指摘も興味をひいた。

❖今回の調査がもたらすもの

後半のセッションは、4名の専門家からのコメントと討論。司会は大林太良氏(東京大学教養学部教授)。

最初に日本のアイヌ関係資料の発掘に努めている大塚和義氏(国立民族学博物館助教授)から。近世には本州の日本海側の港町にアイヌの品物が多数持ち込まれたはずであり、それらの町の旧家に伝わる資料の調査もこれからは重要、と指摘。さらに大塚氏が高知で発見した屏山のアイヌ絵について触れた。

次は多数のアイヌの服飾資料を保有しその内容に詳しい児玉マリ女史(白老アイヌ民族博物館研究員)。同女史はすでに岡田氏より膨大な服飾資料の写真を入手して分類を試みつつあるが、「従来の説を考え直さないと理解できないことばかり」と発言。時間の都合でそのアルバムを紹介できなかったのは残念であった。

アイヌの立場から30年に亘って民族資料を収集・製作し、今はアイヌ語の保存と普及に努めている萱野茂氏(二風谷アイヌ文化資料館館長)は、ヨックモック宣言^{*}について触れた後、資料収集の意味や態度について述べた。「日本ではアイヌのものは大事にされなかったのに、よ



▲討論風景

その国では大事にされていたんだなあ」という感想が印象的であった。

考古学、人類学の立場から長年アイヌ研究に取り組んできた渡辺仁氏（早稲田大学客員教授）は、これからの課題として①博物館学的見地からの問題（どのように保存し利用するか）、②民族誌的問題（アイヌ研究にどう役立つか）、③民族学的・人類学的問題（複合体としての文化をいかに復元するか）があることを指摘、この①、②について詳しく触れた。

これらのコメントとフロアからの質問に対し3名の報告者からの応答があり、最後に「物質文化についての研究は日本では低調であるが、このような研究が刺激になって盛んになることを期待したい」との司会者のコメントで会を閉じた。

なお、この報告会の内容は3月22日夜8時からのNHK教育テレビ「ETV8」で詳しく報道された。

* *AINU Jäger, Fischer, und Sammler in Japans Norden* (J. Kreiner/H. Ölschleger Köln 1978)

**スウェーデンのヨックモックで開かれた世界の少数民族の会議で、博物館にある少数民族の資料をそれぞれの民族に帰してもらおうと宣言したもの。

（なお、当日のレジュメに若干余部があります。ご希望の方は250円切手を同封の上、研究報告会係宛てお申し込みください）

世界の kite・フォト展と国際シンポジウムの開催

開催地：日本kite・フォトグラフィー協会・代表（建築家）室岡克孝

※はじめに

「風による1,000メートルレベルの空撮手法の開発と積雪領域研究への応用」

（87-II-397）と題するテーマでトヨタ財団1988年度の研究助成を受け、一年間の研究を行った。その間、7月にはフランスのラブルギュール市でkite・フォトグラフィー（以下K・P）の100年目にあたる記念国際会議があり、日本からも小生が要請を受け出席した。現在われわれが進めている風による空撮が、何と100年も前からヨーロッパで行われていたのである。その創始者のアルトゥール・パチュを記念した博物館も、そのシンポジウム中に開館した。シンポでは、世界kite・エアリアル・フォトグラフィー協会（K. A. P. W. A.）の会長であるベルギーのミッシェル・ドザリエ氏から、今回は日本で開催するよう要請された。帰国後早速計画を検討し、半年後の2月頃が適切と考え、準備を行った。

行事としては、①世界のK・P展、②K・Pの国際シンポジウム、③K・Pフィールド・デモンストレーションを行ったが、このうち①と②について以下に紹介する。

※多数のマスコミで紹介されたK・P展

この写真展（2月8日～14日）では、助成研究として行った北海道旭川での積雪調査K・P写真や新潟県長岡市での737メートルからのK・P空撮状況を展示した。早稲田大学のスリランカ・シギハヤ遺跡調査、東北大学の阿武隈川の三角洲調査、京都平安博物館古代学協会のエジプト・アコリス遺跡発掘調査、中近東文化センターのエジプト・トゥール市イスラム遺跡調査、そして協会会員による各地のすばらしい作品を約50点展示した。

海外からはK. A. P. W. A.の協力を得て、欧米のK・P写真を約30点展示し、感銘を受けた。アルトゥール・パチュ博

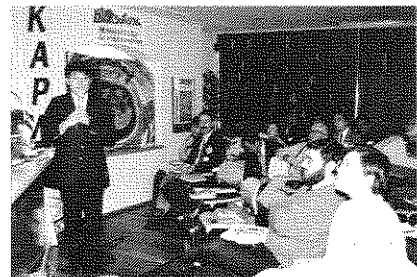
物館の館長セルジュ・ネグル氏により、フランスの100年前のK・P事情の古い写真約20点も特別提供された。

会場の東京新宿野村ビル特設展示ホールは、新宿新都心超高層ビル街の一隅にあり、多数のビジネスマンが興味深そうに作品を鑑賞していた。マスコミに数多く取り上げられ、特に読売新聞では、科学欄で新しい空撮手法として紹介され、NHKでは、夕方と夜のテレビニュースで開催中の展示作品が報道された。そのためあつてか各地から多くの見学者が訪れ、対応が大わらわであった。

※大きな関心を集めた国際シンポ

写真展開催中の2月11日に、新宿のコニカ・プラザで国際シンポジウムを開催し、約60名が出席した。スケジュールは12:00～15:00までの約3時間で、初めに本会を代表して小生が開会宣言を行い、続いてトヨタ財団の山岡氏より挨拶があった。その中で、トヨタ・グループの創始者でもある豊田佐吉翁が風による特別の興味をもっていたという話は、大変面白かった。本題に入り、ミッシェル・ドザリエ氏（前出）から現存の世界のK・P事情について約30分間のスピーチがあり、スライド写真によって各国の活躍の状況が紹介された。次に、セルジュ・ネグル氏（前出）によるK・Pの歴史についての話があり、創始者アルトゥール・パチュに関する当時の状況を、古い機械の模型やスライドをもって説明した。海外の発表にはまだまだ学ぶところが多く、各

▼“風による”研究発表を行う小池氏





国との交流がこの世界をレベル・アップすることになろう。K.A.P.W.A.を中心として国際的にもまとまっていることは誠にすばらしい。この協会には現在約20ヶ国が参加しているが、それぞれの地域でK・Pは有効に利用され、楽しまれているのである。

次に、助成研究の「胤による…」に関して、長岡技術科学大学助教授・小池俊雄氏と法政大学工学部のリモートセンシングの専門家・丸丸厚氏による研究発表が行われた。積雪研究にK・Pを利用し、コンピュータによるデータの解析まで行ったことをスライドにより説明し、出席者の関心をひいた。

休憩の後、法政大学大学院の久保田雅代さん、東京工業大学大学院の八代克彦君による中国での庭園・建築・集落の調査の発表が行われ、最後に勸古代オリエント博物館研究員・脇田重雄氏がシリアのテル・マストゥーマ遺跡発掘調査でのK・P活用の発表を行った。

K・Pによる空撮利用は日本ならず、ヨーロッパやアメリカでも活用されているが、学術的な利用は日本とフランスが一番熱心であり、現状では日本が各国より一歩進んでいるとも言えるだろう。特に、遺跡発掘調査では空撮は不可欠であり、今まで研究者は頭を悩ましてきたと聞く。砂漠の遺跡調査などはまさにK・P空撮に適しており、学術的に貴重な映像をキャッチしつつある。日本で始めてのK・P国際シンポは、おおいに出席者の関心を集め盛況であった。

▽ ▽ ▽

K・Pはこれからも各分野で多方面に活用され、学術的にも貢献できるものと確信する。日本カイト・フォトグラフィ協会はこれに対して大いに協力するつもりである。今回の催しに協力・後援をいただいたトヨタ財団はじめコニカ㈱や各方面の関係者に深くお礼申し上げます。(この写真展とシンポを機会に『手作り人工衛星カイト・フォト』が出版されたが、これについてはP.7参照)

『チャム彫刻』の出版と ヴェトナムでの助成活動

国際助成部門 若山佳子

①チャム族と出版された『チャム彫刻』

国際助成部門では、「東南アジアの固有文化の保存と振興」を目指すプロジェクトを重視して助成を行ってきているが、1985年度にはヴェトナムでも助成を開始した。この度、これらの助成プロジェクトの成果の第一号として『チャム彫刻』(ヴェトナム社会科学院編、A4変型判、235頁)が出版された。

現在、ヴェトナム中部に居住するチャム族は、チャンバという東南アジアでも最も古い王国の一つを創り高い文明を誇っていたが、中でも美術、とりわけ彫刻に優れていた。彼等の建てた寺院の石彫は、1000年以上を経てなお現存しており、その美術的価値は高く評価されている。

ヴェトナム中部地帯に今日チャム族と呼ばれている民族が初めて歴史の舞台に登場したのは今からおよそ2000年の昔と言われており、言語学者や民族学者は、彼等をオーストロネシア語族のマラヨ・ポリネシア語系と分類している。

10世紀から11世紀にかけてヴェトナム人が国家を再建すると、ヴェトナム人はチャム族の文化的蓄積を吸収し、これに対して彼等もヴェトナム人の文化に融合していった。

今日、チャム族の人口はおよそ76,000人で、その多くがトゥアンハイ省とアンザン省に集中している。トゥアンハイ省では彼等の大部分がヒンドゥー教徒で、人口の4分の3を占め、多神教的信仰の影響で様々な民間信仰が残っている。アンザン省に住むチャム族はアラブ系イスラム教徒またはマレー系イスラム教徒であり、イスラム信仰以外を受けつけない。

チャム族の中のヒンドゥー教徒たちは様々な祭りを行い、踊りかつ歌いながら生きる喜びと神への深い崇敬を表わしてきた。このような日常生活の様々な場面

は、当時の建築家や彫刻家により、社寺・仏閣・仏塔などに記録され、今日まで貴重な文化財として残されているのである。東南アジア各地に生命力の溢れた芸術作品を創り出した地域があるが、古代チャンバほど靈魂の偉大さと、生命への深い愛着を高らかに謳歌した作品を持つ地域は数えるほどしかないであろうと言われている。チャムの美術はインド美術の影響を強く受けているが、発展の過程で土着色が濃くなり、次第に民族性を強く表現するようになった。

チャムの彫刻美術は、インド、モン・クメール、マレー、ヴェトナムなどこの地域における様々な芸術のいろいろな特色や性格を併せもったものである。東南アジアの人々が、チャム彫刻に接するとき、「身近な感じで外国のものという感じがしない」とか、「作品の中に自分の姿を見出す」という印象をもつが、同時に「自分と全く同じものではない」という感想も抱くという点が本書の解説に記されていることは意味深い。

本書はヴェトナム各地の博物館所蔵のチャム彫刻、および現存のチャム寺院の彫刻を写真に撮影し、ヴェトナム語、英語、日本語で解説をつけて出版された。印刷は日本で行われたが、3,000部はヴェトナムに寄贈され、1,000部は日本で販売されている。(連合出版・刊、4,800円)



①ヴェトナムで進行中のプロジェクト
現在ヴェトナムでは、上記のプロジェクトに続いて様々なプロジェクトが行われている。その中のいくつかをここで紹



介したいと思う。

「チャムの歴史と文化」は、チャム族の歴史と文化をより深く研究しようとするもので、彼等の文化を保存することも目的としている。また、チャム族と東南アジアの民族との相似点や関係も明らかにする。

「『ドンソン銅鼓』の編集と出版」のプロジェクトでは、これまでにベトナムで発見された229のドンソン銅鼓の白黒写真、スケッチを実測値をつけて出版しようとするものである。東南アジアの古代史に関しては未だ不明の点が多いが、中でもベトナムから出土するドンソン銅鼓は古代史を探る重要な鍵であると見られている。この考古学的出土品の分布地域はドンソン文化圏と呼ばれ、1つの有力な共通の文化を持つ人間の集団が存在したと考えられている。最近になって、同種の銅鼓が中国南部でも発見され、ドンソン銅鼓をめぐる考古学研究は一層広がりを持つようになってきた。

「メコンデルタの文化的特色と人口」はベトナムの経済発展に大きな役割を果たしているメコンデルタの少数民族の伝統文化を調査し、彼らの近隣諸国（カンブチア、ラオス、タイ）、東南アジア島嶼部、インド、中近東の人々との経済・文化交流活動を調査する。

「ベトナムの漢字およびノム文字による碑文研究」は、ベトナムにも日本や韓国のように残っている、漢字および漢字を基にしてつくられたノム文字で書かれた碑文文献を調査し、拓本収集を行い、ベトナムの歴史研究に役立てようというものである。

* * *

ベトナムは、現在急速に自由化を進めており、経済だけではなく、文化的にも周辺諸国との交流を求めている。そのためには長い戦争の間に遅れてしまった自国の学術研究を進め、その成果を海外にも発表することが急務である。ベトナムの研究者のこの点にける熱意は大きい。

1988年度助成額および1989年度助成予定額 (P.1 参照)

単位・万円

助成項目	88年度助成額	89年度助成予定額
1. 研究助成	59件 20,070	20,000
2. 市民活動助成	16 2,500	2,500
3. 研究コンクール助成	10 2,800	2,000
・第4回	—	2,000
・第5回	10 2,800	—
4. 国際助成	85 11,834	12,000
5. 翻訳出版促進助成（「隣プロ」）	16 4,955	6,000
6. 東南アジア研究	1 1,455	1,500
英訳刊行助成		
7. 計画助成	13 4,125	4,000
・フォーラムへの助成	6 1,515	1,300
・特別研究への助成	1 750	700
・民間助成活動促進のための助成	2 1,300	1,000
・その他の助成	4 560	1,000
8. 成果発表助成	22 2,965	3,000
合計	222件 50,704	51,000

新刊紹介

『写真民族誌 須恵村 1935～1985』
牛島盛光・著
日本経済評論社（1988.12）・刊
B5判ヨコ 158頁、上製箱入、4,800円

熊本県の須恵村は、1935年にアメリカの若き文化人類学者ジョン・エンブリーが夫人とともに滞在して調査した農村として有名である。その成果は、*Suye Mura, A Japanese Village* として発表され、日本農村研究の古典となっている。

当時中学生としてエンブリーの講演を聞いた牛島氏は、1951年以来、その村の変容を克明に追いつけているが、彼が残したコーネル大学所蔵の写真と氏が保有する写真200余点をもとに、50年の村の生活・生業の変化を対比させて編集したのが本書である。簡潔な写真説明と巻末



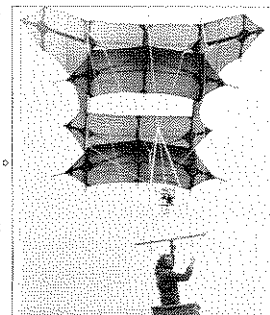
の解説によって、研究の歴史と村の歴史が二重写しになって甦る。当財団からは、追跡研究と編集に対して助成が行われた。

『手作り人工衛星 カイト・フォト』
室岡克孝・著
N T T出版（1989.1）・刊
四六判 222頁、並製、1,300円

風糸にカメラを吊り上げて航空写真を撮るという手法は、フランスでは100年前に始まった。この手法を日本の精密技術を用いて発展させ、様々な研究分野での応用を試みてきたのが本著者の室岡氏である。

氏はすでに、前回の研究助成による成果を写真集『カイト・フォトグラフィ』(写真工業出版社・刊)として出版しているが、その後

の助成により1000mレベルからの撮影に挑戦している。今回の出版はその体験を踏まえてエッセイ風にカイト





フォトの仕組や可能性を解説したものである。種々の専門分野でのその後の普及状況や海外の歴史と現状なども交えて紹介されており、読物としても大変面白い。手軽な空撮手法としてのカイトフォトの入門書にもなろう。

『住宅事情をどうみるか』
住宅新指標研究会・編
ドメス出版(1989.4)・刊
A5判 224頁、上製・カバー装、
3,605円(税込)

現在の住宅事情を知る基本統計としては、5年おきに実施される総務庁の「住宅統計調査」があるが、実態を的確にとらえるという点でかなり問題があることは以前から指摘されてきた。では、どういう指標によるどの様な統計が相応しいのか。日本住宅会議に設けられた住宅白書研究会は、従来の指標の検討から新しい指標を模索し、実際にそれによって1986年に大阪府豊中市で実態調査(85年度研究助成対象)を行った。

本書はその調査結果をまとめたもので、第I部では、調査の具体的な内容を「安らぎ」「健康」「安全」「秩序」等々の項目ごとにまとめ、第II部では、その調査に関わる理論的問題を扱っている。

訃報

当財団の設立当初より、評議員として長年にわたりご指導をいただいております松本重治氏(財団法人国際文化会館・理事長)は、去る1月10日、脳梗塞のため他界されました(享年89歳)。戦前、戦中は、国際ジャーナリストとしてご活躍のかたわら、日中戦争や太平洋戦争停戦のための和平工作に献身。戦後は、自ら創設した(財)国際文化会館を拠点に、一貫して民間国際交流の促進に後半生を捧げてこられました。昭和44年には勲一等瑞宝賞を授与され、同51年には文化功労者に顕彰されました。

氏の多大なるご功績をしのび、ここに深く哀悼の意を表する次第です。

第26回研究報告会のご案内

「職場の中の日本とアジア」

日時・1989年4月21日(金)

10:00~16:30

場所・国際文化会館(東京・六本木)

[セッション1]

座長・佐藤一郎(国際経済研究所)

研究報告・アセアン諸国における日本の
マネジメントの受容過程

報告1 山下彰一(広大・経済)

報告2 竹内常善(同上)

報告3 プラユーンシワタナ(チュロンコン大)

コメント 林 華生(名大・経済)

コメント 安保哲夫(東大・社研)

[セッション2]

座長・祖父江孝男(放送大)

職場集団における文化摩擦と
研究報告・葛藤——便宜置籍船乗組員の
場合——

報告1 大橋信夫(長野短大)

報告2 大塚柳太郎(東大・医)

報告3 レジD. キヤブア(フィリピン商船大)

コメント 花見 忠(上智大・法)

コメント 新山恒彦(毎日新聞)

●出席ご希望の方は、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、お葉書にて4月17日までに財団報告会係宛てお申込み下さい。

お知らせ

当財団では、昨年度の助成研究(個人奨励研究)につき、下記の通り経過報告会を予定しております。ご関心おもちの方は、研究助成部門までお問合せ下さい。

[日時] 1989年5月13日(土)

10:00~17:00

[場所] 国際文化会館
セミナールームD室

『中小企業の女性たち』

昭和63年度中小企業研究奨励賞を受賞!

♣ ♣ ♣

国際女性学会の「中小企業の女性を研究する会」が一昨年11月にまとめた標記の本(編集代表・原ひろ子、村松安子、南千恵、未来社・刊、本レポートNo.43で紹介)が、(財)商工総合研究所の昭和63年度・中小企業研究奨励賞に選ばれた。

中小企業の女性の経営参画者と管理者を、女性の研究者が中心となってキメ細かくインタビューしたもののまとめ上げるまでに、5年を要した力作だけに、関係者の喜びも大きいことと思う。

皆さん、おめでとうございました!

編集後記

▶最近の国内景気は好調の一途である。'86年の11月をボトムとする今回の好況は、戦後最大と言われる「いざなぎ景気」('65年後半から'75年半ば)に勝るとも劣らないものと見られている。

▶これを象徴するかの様に、各地で博覧会の開催または計画が目白押し。加えるに、全国各市町村に対する一律1億円のお上からのお土産。内需振興の進軍ラッパは当分鳴り止みそうにない。

▶ただし、これは日本国内のこと。目を一歩外に転じれば、紛争・累積債務・貧困・餓饉、等々の問題に喘いでいる国々や人々が多数存在するのもまた事実。

▶見方を変えれば、今の日本の平和や繁栄は、そうした国々や人々の犠牲の上に成り立っているとさえ言える。

▶今ほど日本が国際社会からその力量(貢献)を試されている時はないだろう。

好況に浮かれず、「今、日本人として国際社会に対して何が出来るか」を、一人一人が真剣に問う時期に来ている。

発行日 1989年4月15日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工芸株式会社

トヨタ財団レポート No.48

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。